# 児童の対人的信頼感と対人行動に関する一考察

## －児童養護施設入所児と家庭児との比較を通して－

藤　原　亜希子・牧　　正　興

# Dependence / Regression of A Child and Relevance with Confidence

## — Comparison with A General Elementary School Child and Child Nursing Home Child —

Akiko Fujihara・Seikoh Maki

## Ⅰ　はじめに

現在、児童養護施設は全国に約550箇所あり、約30,000人の子どもたちが養護されている（平成15年２月、厚生労働省）。児童養護施設とは、児童福祉法第41条によって定められた「乳児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童を入所させて、これを養護し、あわせてその自立を支援すること」を目的とした施設である。児童の入所理由においては、近年、主に養育困難、養育者不在、経済的理由、そして虐待があげられ、入所児は何らかの情緒的問題・行動上の問題を持って入所してくることが指摘されている（許斐、2003）。特に、入所児のほとんどが年齢よりも幼いように感じ、特に大人（施設職員）への甘えや独占欲が目立って感じられた。また、孤独・淋しさを訴える児童や、他者への信頼を寄せながらも信頼していない素振りを見せるといったアンビバレントさを感じさせる児童もみられた。

これらの入所児の行動については、Bowlbyがその原因として乳幼児の愛着に関心を向けている。「『愛着』とは、特定の対象とされた人物、通常は母親の近くにいようとしたり、その人との身体的接触を求めたりする活動のこと（Bowlby、1958）」である。母親は、人間が初めて出会う人物であり、それを対象とする愛着形成は人間の最初の対人関係の形成であると考えられている（井上、1992）。そこで安定した愛着形成が得られると、それを拠り所として複数の他者と対人関係を形成すると考えられている。しかしながら愛着はその後の対人関係においてはあまり影響を及ぼさないとされる見解もあり、最近では対人関係において他者への信頼感が重要とされる視点がある。Becker-Stoll & Fremmer-Bombik（1997）の研究では、「６歳時点で測定した愛着タイプ（乳幼児期における親子の愛着関係の質に関するもの）と、16歳時点で測定したアダルト・アタッチメント・インタビュー（Main, Kaplan, & Cassidy、1985）での愛着タイプとが必ずしも対応関係にないこと」や「10歳時点での愛着の個人差を予測するのに、幼少期における養育者との関係性よりも同時点（10歳時点）での養育者との関係性の予測率のほうが高いこと。」などが明らかにされた。また井上（1992）は、母親を対人関係の拠り所とするような対人関係と子どもの対人関係との連続性は、おおよそ乳児期から幼児期にとどまるものではないかと述べている。またLewis & Feiringは社会ネットワーク理論（Social Network Theory）を提唱し「乳児が生後から関わる他者は養育者以外にもたくさん存在し、そのそれぞれから独立した影響をうけて成長していく」と説明している（酒井、2005）。

以上のことから、母親との愛着形成が、成長過程における対人関係の基盤となっているものの、母親を拠り所とする乳幼児期の愛着関係は、その後の愛着関係を予測し難く、関係性は幼児期にとどまるものと考えられる。人間は発達に伴い対人関係の対象も質も多様化し、実際には成長過程において、愛着形成と対人関係との関連がないとも考えられている。一概に愛着形成と対人関係との関連性があると言えないのが、最近の研究動向としてある。

そこで愛着にかわる対人関係の要因として、酒井（2005）は対人的信頼感研究を行っている。対人的信頼感とは、「特定の重要な他者の自分に対する態度や感情などの情報から得られる、(a)相手には自分を裏切る意図がなく、自分を幸福にしようと願っているであろうという期待に関する感覚（信頼している感、sense of trusting）と、(b)自分には相手を裏切る意図はなく相手を幸福にしようと願っているであろうという自分に対する期待に関する感覚（信頼されている感、sense of trusted）の両者から構成される対人感情である」。

酒井（2005）の小学生のネガティブ・ライフイベンツと対人的信頼感との関連についての研究では、学校での友人間でのイベントではきょうだいや親友との信頼感が抑うつ傾向が軽減し、成績の低下やペットの死去などのイベントにおいては、家族や親友との信頼感が有意に働いている。とくに学校でのいじめにおいては母親との信頼感が有意に働き、抑うつ傾向を軽減している。このこ

とから児童の他者への信頼感が生活の支えとなっているのではないかと考えられる。

これまでの入所児における研究では、高木ら（1954）が、乳児院の子どもたちが、対人関係面で表面的な関係しかもてないことや、自発性の欠如、攻撃性が直接に表現されないこと、逃避的傾向の強いこと、場の影響を強く受けることなどを指摘している。最近では大島(2003)が、児童養護施設の養育環境などから、入所児の「愛着の対象は拡散しやすく、むしろ人よりも場の適応が優先されるとも言える」と論じている。またこれまでの愛着研究や入所児の特長などによって加藤（2003）は、施設児の子どもの基本的な他者や自己への信頼感、自己の感情コントロール感の欠如が生じると述べている。しかしながらこれらは現象的な記述にとどまっている。

そこで本研究は、入所児の特徴的な依存、退行にみられる対人行動が他者への信頼感に関連していると考え、まず一般家庭児童（以下、家庭児）の対人的信頼感と対人行動の関連性を検討する。そして家庭児・児童養護施設入所児両群の比較を通して、児童養護施設児における対人的信頼感と対人行動の特徴について検討する。

## Ⅱ　目的

①児童の対人的信頼感が、依存、退行にみられる対人行動とどのように関連しているのかについて検討し、②入所児と家庭児との比較を通して入所児の対人的信頼感と対人的行動の特長について検討する。さらに、③入所児における対人行動様態の特徴を明らかにする。

## Ⅲ　方法

1）対象

家庭児：A町立小学校の小学4～6年生の家庭児109名（男児64名・女児45名）。[内訳：4年生37名（男児27名、女児10名）、5年生23名（男児9名、女児14名）、6年生49名（男児28名、女児21名）]

入所児：B県、C県、D県における児童養護施設3施設に入所する小学4～6年生の入所児28名。4年生8名（男児4名、女児4名）。5年生10名（男児6名、女児4名）。6年生10名（男児5名、女児5名）。

2）調査内容

(a)対人的信頼感尺度（酒井、2005）：24項目、4件法。「○○を信頼している感」「○○から信頼されている感」の2尺度を仮定したもの。今回は、信頼感の対象として、「親」「友だち」「まわりの大人（学校の先生）」の3対象とした。ただし入所児への心的作用に配慮し、入所児については「親への信頼感」を「施設職員への信頼感」として調査を行った（付表を参照）。A小学校では、教諭によって実施され回収された。B施設では筆者が自ら実施し、回収した。C、D施設では、施設職員によって実施され回収された。

(b)対人行動尺度（TS式幼児・児童性格診断検査）：24項目、4件法。TS式幼児・児童性格診断検査より、「依存」特性、「退行」特性を選択した（付表を参照）。「依存」特性は、親や周囲の人に依存しないでどれだけ自分のことを自分でできるかを理解しようとするもので、子どもの発達上もっとも望まれる社会的性格の基礎を測り、とくに養育者の養育態度やしつけと密接に関連している特性を示している。「退行」特性は、幼児や児童の成長過程で一時的に発達上の後戻り現象が生じることを測るものである。A小学校の児童については学級担任が回答し、B、C、D施設では児童の担当職員が回答した。

〈付表〉

● 対人的信頼感尺度

**親又は児童担当職員への信頼感**

・親(先生)はあなたのことがとてもすきだと思いますか。
・親(先生)はあなたをとても信頼していると思いますか。
・あなたと一緒にいて親（先生）はしあわせだと思いますか。
・親（先生）はあなたに何でも話してくれますか。
・親（先生）はだれよりも信頼できますか。
・あなたは親（先生）といっしょにいてしあわせですか。
・あなたは親（先生）が好きですか。
・あなたは親（先生）には何でも話せますか。

**友だちへの信頼感**

・友だちはあなたのことがとてもすきだと思いますか。
・友だちはあなたのことをとても信頼していると思いますか。
・あなたと一緒にいて友だちはしあわせだと思いますか。
・友だちはあなたに何でも話してくれますか。
・友だちはだれよりも信頼できますか。
・あなたは友だちといっしょにいてしあわせですか。
・あなたは友だちが好きですか。
・あなたは友だちには何でも話せますか。

**まわりの大人への信頼感　＊まわりの大人とは、学校の先生や放課後学級の先生を指す**

・あなたのまわりの大人はあなたのことがとてもすきだと思いますか。
・あなたのまわりの大人はあなたをとても信頼していると思いますか。
・あなたと一緒にいてあなたのまわりの大人はしあわせだと思いますか。
・あなたのまわりの大人はあなたに何でも話してくれますか。
・あなたのまわりの大人はだれよりも信頼できますか。
・あなたはあなたのまわりの大人といっしょにいてしあわせですか。

・あなたはあなたのまわりの大人が好きですか。
・あなたはあなたのまわりの大人には何でも話せますか。

● 対人行動尺度

**依存特性**

1．自分一人で出来ることでも先生にたよりたがりますか。
2．自分の持ち物を自分で準備することがなかなか出来ませんか。
3．遊びや勉強のあとかたづけが出来ないで困りますか。
4．むずかしい勉強や仕事はすぐ投げだしてしまいますか。
5．誰かが見てやれば出来ることでも、自分一人では出来ないことが多いですか。
6．頼まれた仕事にとりかかるのがおそく、手間どりますか。
7．先生が注意してやらないと、なかなか起きれないことが多いですか。
8．机の上の整理など、一人ではなかなか出来ないですか。
9．朝なかなか起きれないのに、いつまでも夜ふかししますか。
10．用事をいいつけても、たよりなくてまかせられませんか。
11．何ごとによらず自分から進んでやろうという気はあまりないほうですか。
12．いつも誰かにたよろうとする気持ちが強いですか。

**退行特性**

13．指しゃぶりのくせがありますか。（あるいは前にそういうくせがありましたか。）
14．年上とか年下の子とばかり遊びたがりますか。
15．身体はどんどん成長するのに、心の方はいつまでも幼い感じがしますか。
16．前は一人で出来たことでも、先生に手伝ってもらいたがることがありますか。
17．年齢のわりに甘えた言葉づかいをしたり、子どもっぽいふるまいをすることがありますか。
18．泣き虫で、ちょっとしたことですぐメソメソしますか。
19．先生のひざにのっかって来たり抱かれたり、くっついたりすることがありますか。
20．ちょっとしたことで、すぐふくれたりすねたりしますか。
21．大人の話にわりこみたがりますか。
22．夜はまだ一人で寝れず、一人にしてもいつの間にか先生のそばに来ていることがありますか。
23．たいくつすると、特に甘え方がはげしくなるようなところがありますか。
24．自分だけが特に先生からかわいがられようとする気持ちが強いですか。

**Table 1　対人的信頼感尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）**

| 項目内容 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ |
|---|---|---|---|
| あなたのまわりの大人は誰よりも信頼できますか。 | .95 | −.13 | −.21 |
| あなたと一緒にいてあなたのまわりの大人は幸せだとおもいますか。 | .83 | −.03 | .03 |
| あなたのまわりの大人はあなたのことがとても好きだと思いますか。 | .78 | −.02 | .12 |
| あなたのまわりの大人はあなたに何でも話してくれますか。 | .77 | .07 | −.08 |
| あなたはあなたのまわりの大人が好きですか。 | .74 | .05 | .00 |
| あなたのまわりの大人はあなたをとても信頼していると思いますか。 | .73 | .08 | .08 |
| あなたはあなたのまわりの大人と一緒にいて幸せですか。 | .72 | .02 | .09 |
| あなたはあなたのまわりの大人が好きですか。 | .67 | .13 | −.03 |
| あなたは親と一緒にいて幸せですか。 | −.10 | .90 | .01 |
| あなたは親が好きですか。 | −.03 | .87 | −.07 |
| あなたと一緒にいて親は幸せだと思いますか。 | −.05 | .77 | .13 |
| 親は誰よりも信頼できますか。 | .02 | .72 | −.12 |
| 親はあなたをとても信頼していると思いますか。 | .11 | .55 | .08 |
| 親はあなたに何でも話してくれますか。 | .22 | .48 | −.09 |
| あなたは親には何でも話せますか。 | .17 | .45 | .04 |
| 親はあなたのことがとても好きだと思いますか。 | .18 | .39 | .24 |
| あなたは友だちと一緒にいて幸せですか。 | −.07 | −.06 | .83 |
| 友だちはあなたのことがとても好きだと思いますか。 | .16 | −.09 | .74 |
| 友だちはあなたをとても信頼していると思いますか。 | .01 | −.04 | .73 |
| あなたは友だちが好きですか。 | −.09 | .04 | .72 |
| あなたと一緒にいて友だちは幸せだと思いますか。 | .12 | .05 | .59 |
| あなたは友だちには何でも話せますか。 | −.18 | .07 | .52 |
| 友だちは誰よりも信頼できますか。 | .03 | −.11 | .48 |
| 友だちはあなたに何でも話してくれますか。 | −.03 | .18 | .45 |
| 因子間相関 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ |
| Ⅰ | − | .62 | .54 |
| Ⅱ | | − | .63 |
| Ⅲ | | | − |

Table 2　対人的信頼感尺度の下位尺度間相関、平均値、*SD*

| | 親への信頼感 | 友だちへの信頼感 | まわりの大人への信頼感 | 平均 | *SD* |
|---|---|---|---|---|---|
| 親への信頼感 | − | .54** | .62** | 26.10 | 5.00 |
| 友だちへの信頼感 | | − | .43** | 22.41 | 3.76 |
| まわりの大人への信頼感 | | | − | 18.10 | 5.41 |

**$p<.01$

## Ⅳ　結果

### 1．対人的信頼感と対人行動の関連性について

1）対人的信頼感尺度の因子分析

酒井（2005）の対人的信頼感尺度24項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況（9.86、2.42、1.68、1.34、…）と因子の解釈可能性から３因子を抽出した（Table 1）。

第１因子は大人への信頼といった８項目で構成されていることから、「まわりの大人への信頼感」因子と命名した。第２因子は親への信頼といった８項目で構成されていることから、「親への信頼感」因子と命名した。第３因子は友だちへの信頼といった内容の８項目で構成されていることから、「友だちへの信頼感」因子と命名した。

2）下位尺度間の関連

対人的信頼感尺度の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を、下位尺度得点とした。Table 2 に各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示す。内的整合性を検討するためにα係数を算出したところ、「まわりの大人への信頼感」で.93、「親への信頼感」で.88、「友だちへの信頼感」で.83と十分な値が得られた。

対人的信頼感尺度の下位尺度間相関を Table 2 に示す。３つの下位尺度は互いに有意な中程度の正の相関を示した。

また、対人行動尺度の下位尺度間の相関係数は.62と有意な中程度の正の相関を示した。

3）対人的信頼感と対人行動の関連

対人的信頼感尺度と対人行動尺度の下位尺度間でそれぞれ相関分析を行った（Table 3）。

①「親への信頼感」と「依存」、「親への信頼感」と「退行」がそれぞれ１％水準で有意な負の相関が見られた。

②「友だちへの信頼感」と「依存」、「友だちへの信頼感」と「退行」がそれぞれ１％水準で有意な負の相関が見られた。

③「まわりの大人への信頼感」と「依存」が５％水準で、「まわりの大人への信頼感」と「退行」が１％水準で有意な負の相関が見られた。

Table 3　対人的信頼感尺度と対人行動尺度の関連（*N*＝109）

| | 依存 | 退行 |
|---|---|---|
| 親への信頼感 | −.30** | −.39** |
| 友だちへの信頼感 | −.38** | −.43** |
| まわりの大人への信頼感 | −.20* | −.28** |

*$p<.05$、**$p<.01$

4）家庭児の対人的信頼感と対人行動の位置づけ

各尺度における下位尺度ごとに項目得点の合計値を算出し、それらについて最近隣法によるクラスター分析を行った。その結果、第１のクラスターでは依存行動と退行行動がまとまりをみせ、これは対人行動群であった。第２のクラスターでは親への信頼感と友だちへの信頼感、最後にまわりの大人への信頼感がまとまりをみせ、これは対人的信頼感群であった（Fig. 1）。

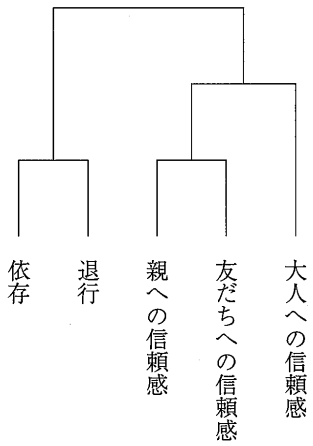


Fig. 1　家庭児における対人的信頼感と対人行動との位置づけ

### 2．家庭児と入所児における対人的信頼感と対人行動の比較

1）対人的信頼感と対人行動の比較

入所児と家庭児の検討を行うために、対人的信頼感尺度、対人行動尺度の各下位尺度得点について *t* 検定を行った。（Table 4）。その結果、「親または施設職員への信頼感」では家庭児の得点が高く（$t(135)=3.13, p<.01$）、「依存」（$t(135)=-4.45,\ p<.01$）、「退行」（$t(135)=-6.20,\ p<.01$）では入所児が有意に高い得点を示していた。「まわりの大人への信頼感」、「友だちへの信頼感」については得点差は有意ではなかった。

また「親への信頼感」の項目について t 検定を行ったところ、対人的信頼感の自己開示以外の項目において、

**Table 4　家庭児・入所児別の平均値と *SD* および *t* 検定の結果**

| | 家庭児（$N=109$） | | 入所児（$N=28$） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平均 | *SD* | 平均 | *SD* | *t* 値 |
| 親（施設職員）への信頼感 | 26.10 | 5.00 | 22.04 | 6.39 | 3.13** |
| 友だちへの信頼感 | 25.44 | 4.28 | 26.07 | 4.80 | −.68 |
| まわりの大人への信頼感 | 20.78 | 6.17 | 20.36 | 6.84 | .32 |
| 依存 | 15.54 | 6.60 | 23.07 | 8.30 | −4.45** |
| 退行 | 13.38 | 3.22 | 22.11 | 7.27 | −6.20** |

**$p<.01$

**Table 5　家庭児・入所児別の平均値と *SD* および *t* 検定の結果**

| | 家庭児（$N=109$） | | 入所児（$N=28$） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平均 | *SD* | 平均 | *SD* | *t* 値 |
| ・親（先生）はあなたのことがとてもすきだと思いますか。 | 3.37 | .75 | 2.61 | 1.20 | 3.20*** |
| ・親（先生）はあなたをとても信頼していると思いますか。 | 2.98 | .92 | 2.61 | .92 | 1.92** |
| ・あなたと一緒にいて親（先生）はしあわせだと思いますか。 | 3.27 | .87 | 2.61 | 1.13 | 2.87*** |
| ・親（先生）はあなたに何でも話してくれますか。 | 2.98 | .93 | 2.89 | 1.07 | .44 |
| ・親（先生）はだれよりも信頼できますか。 | 3.50 | .81 | 2.71 | .94 | 4.40*** |
| ・あなたは親（先生）といっしょにいてしあわせですか。 | 3.62 | .66 | 2.89 | 1.03 | 3.57*** |
| ・あなたは親（先生）が好きですか。 | 3.40 | .83 | 2.96 | 1.07 | 2.02** |
| ・あなたは親（先生）には何でも話せますか。 | 2.98 | .97 | 2.75 | .93 | 1.14 |

**$p<.05$、***$p<.01$

家庭児の得点が高いという有意な得点差が見られた（Table 5）。

2）対人的信頼感尺度における各下位尺度の関連性の比較

対人的信頼感における3因子の下位尺度得点を検討するために分散分析を行った。3因子の下位尺度得点の平均値を入所児、家庭児それぞれ Figure 2、3に示す。

①入所児では、有意な得点差はみられなかった（$F(2, 25)=2.02$, *n.s.*）。

②家庭児では、「親への信頼感」＞「友だちへの信頼感」＞「まわりの大人への信頼感」の順で有意であった（$F(2, 324)=33.76$, $p<.01$）。

**3．行動様態別の入所児の特徴**

対人行動で得られた「依存」「退行」特性の結果を高木らのパーセンタイル順位にならって、パーセンタイル順位2順位に変換した後で分類したところ、『家庭児一般型』『家庭児依存型』『入所児一般型』『入所児依存型』『入所児退行型』『入所児依存退行型』に分類できた（Table 5）。$\chi^2$検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが見られた（$\chi^2=334.723$, $df=5$, $p<.01$）。『入所児依存型』は1名のみ所属していたのでその後の検定では省いた。

ここで高木らのTS式幼児・児童性格診断検査に基づくと、『依存型』は児童の心理的環境を再構成する必要があるとされ、『退行型』は児童にとって退行が長引けば、円満な人格形成が阻害されることになるとされる。

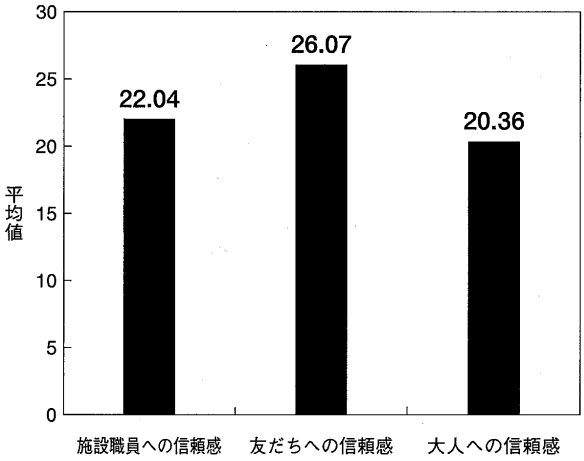


**Fig. 2　入所児の対人的信頼感得点**

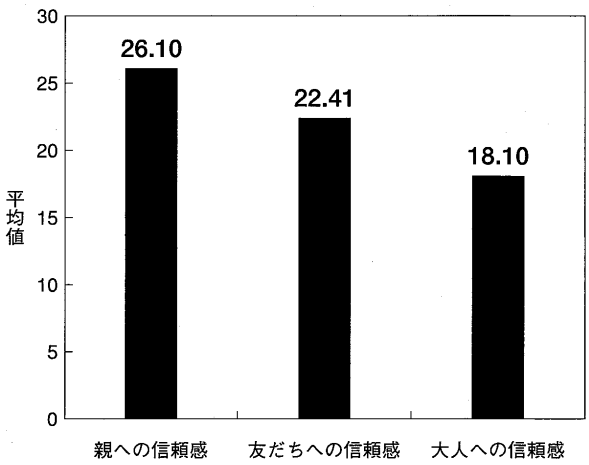


**Fig. 3　家庭児の対人的信頼感得点**

『依存退行型』はその両特性をあわせもつものとされる。

Table 5　対人行動の分類

| 家庭児一般型 | 家庭児依存型 | 入所児一般型 | 入所児依存型 | 入所児退行型 | 入所児依存退行 |
|---|---|---|---|---|---|
| 102 | 7 | 16 | 1 | 5 | 6 |

$\chi^2$=334.723、$df$=5、$p$<.01

以下、5群間における「対人的信頼感尺度」3つの下位尺度について、それぞれ分散分析を行った。

①「親または施設職員への信頼感」に関しては、分散分析の結果、群間の得点差は1％水準で有意であった($F$（4，131）=3.67，$p$<.01)。Tukey の HSD 法（5％水準)による多重比較を行ったところ、「家庭児一般型」>「入所児一般型」で有意な得点差が見られた。

②「友だちへの信頼感」に関しては、分散分析の結果、群間の得点差は5％水準で優位であった（$F$（4，131）=2.95，$p$<.05)。Tukey の HSD 法（5％水準）による多重比較を行ったところ、「家庭児一般型」>「家庭児依存型」、「入所児一般型」>「家庭児依存型」、「入所児依存退行型」>「家庭児依存型」において有意な得点差が見られた。

③「まわりの大人への信頼感」に関しては、分散分析の結果、有意な群間の得点差は見られなかった（$F$（4，131）=0.10，$n.s.$)。

## V　考察

### 1．対人的信頼感と対人行動の関連性について

今回使用した対人的信頼感尺度では、酒井（2005）が仮定する「信頼している感」「信頼されている感」の2因子構造ではなく、対象別に3因子構造となった。このことについて酒井（2005）は、児童は「自分と相手からの両者の視点から分化させて考えるのに十分な認知的発達が達成されていない」としており、この認知的発達の未熟さが今回の研究でも示唆されたことが伺える。

対人的信頼感尺度と対人行動尺度の関連性は、弱い負の相関を示したが値はあまり高くない。今回の調査では、対人的信頼感の高低によって対人行動に変化が現れるほどのばらつきがなかったことが伺えた。またクラスター分析においても、対人的信頼感群、対人行動群の2群にまとまりを見せたことから、対人的信頼感と対人行動の関係が弱いことが伺える。対人的信頼感に関しては、『親への信頼感』と『友だちへの信頼感』とがまとまりを見せていたため、「親」と「友だち」が信頼感の対象として近い対象であり、その次に「まわりの大人(学校教諭)」であることが伺える。このことから、「親」と「友だち」は信頼感の対象として近い存在であることが考えられ、小学4年生から6年生の子どもたちの重要な他者が「親」から「友だち」へと変遷していることを示唆しているとも考えられる。また、「友だち」という存在が子どもたちの信頼感に影響を与える存在とも考えられる結果となった。

### 2．入所児と家庭児における対人的信頼感と対人行動の比較

入所児と家庭児の比較において、対人行動尺度では、「依存」「退行」の両特性で、入所児の得点が有意に高いという結果が得られた。中でも「親または施設職員への信頼感」では、家庭児の得点が有意に高いという結果が得られた。家庭児における「親」と、入所児における「施設職員」を同等の存在と仮定して研究を行ったが、入所児における「施設職員」が必ずしも「親」と同等の相手ではないことが示唆される結果となった。「親または施設職員への信頼感」の項目ごとの $t$ 検定では、自己開示以外の項目で有意な得点差が見られた。このことから、入所児にとって「施設職員」が「親」と同等の自己開示の対象として認識されていることが示唆された。

また信頼感の対象別に検討したところ、家庭児は「親」>「友だち」>「まわりの大人」という結果が得られた。加えて、前述のクラスター分析の結果からも「親」や「友だち」が信頼感における重要な他者であることが考えられる。入所児では信頼感の対象間に有意な得点差は見られなかったものの、得点の高い「施設職員」と「友だち」が信頼感において重要な他者であることが伺える。

今回の調査結果から、第一に入所児は有意に「依存」、「退行」の対人行動を示すことがわかった。このことはこれまで事象的に論じられてきた入所児に見られる特徴的な行動を裏付ける結果が得られたと考えられる。第二に入所児にとって「施設職員」が「親」と同等の存在であるか否かは明らかではないものの、信頼感を抱ける、特に自己開示のできる重要な他者であることがわかった。これは、入所児にとって施設職員が十分に信頼できる相手であることを示唆していると考えられる。また、今回の調査で興味深いことは、児童養護施設などの生活状況に関わらず子どもたちの信頼できる他者が家庭、施設、そして学校という場に存在することが明らかになったことである。このことは、子どもたちの心理支援のエンパワメントの一つとして、友だちや学校教諭が役割を担うことができることを示唆していると思われる。

### 3．対人行動様態別の入所児の特徴

対人行動における分類では、何かしらの問題が見られる『依存型』『退行型』『依存退行型』において、家庭児に比べ入所児の人数が多かった。このことは、前述した入所児と家庭児における対人行動の比較においても明らかになっている。また入所児では『一般型』に次いで『依存退行型』の人数比が有意に多かったことから、入所児の「依存」「退行」における対人行動への支援の必要性の高さが伺える結果となった。

次に対人的信頼感との関連については、「親または施設職員への信頼感」において「家庭児一般型」>「入所

児一般型」で有意な得点差が見られた。「友だちへの信頼感」においては「家庭児一般型」・「入所児一般型」・「入所児依存退行型」＞「家庭児依存型」の各々において有意な得点差が見られた。「まわりの大人への信頼感」においては有意な得点差は見られなかった。このことは、親や施設職員といった児童にとって生活場面における重要な他者への信頼感には、対人行動があまり作用せず、家庭か施設かといった生活状況が作用していることを示唆していると思われる。その一方で児童にとって学校場面や生活場面を通して重要な他者である友だちへの信頼感には、児童の「家庭」という生活状況と「依存」という対人行動が作用していることが示唆される。そもそもこの研究における「依存」とは「子どもの発達上もっとも望まれる社会的性格の基礎」とされている。この依存に問題があるとされるならば「しつけの方法や子どもを取り巻く心理的環境を再構成する必要がある」と高木らは説明している。このことと今回の調査結果から、友だちへの信頼感には特に家庭における子どもを取り巻く心理的環境が作用していることが推測される。

## Ⅵ　今後の展望

今回の研究は、児童期における対人的信頼感と依存・退行にみられる対人行動との関連性について検討することであった。今回の調査では弱い相関関係が見られたものの十分な結果とは言い難い。しかしながら対人的信頼感においては信頼感の対象別に相関がみられ、教育現場でみられる子どもの他者に対する信頼は、家族や友だちなどの重要な他者に対する信頼を推測できる一つの視点として考えられることが推測された。

児童養護施設入所児においては依存、退行の対人行動において問題が見られる児童が多くみられた。ここ最近では虐待による入所措置が増加しており、そのことが影響していることも考えられる。さまざまな要因が考えられるものの、これらの入所児に対しては何らかのケアが必要と考えられる。児童養護施設においては心理士を配置し、児童に対して心理的なケアを施すことが義務付けられようとしている。これらの入所児に対しては、心理的ケアだけでなく、施設職員と一体となり生活場面を通じてケアをしていく必要がある。このような対人行動を示す子どもを早期発見し、その子どもへのより良い支援を行うことを目的として、今回のような調査を行うことは必要であると思われる。そして今回の研究から示唆されたように友だちや学校教諭といった「学校」という新しいエンパワメントの力を通じて児童の心理支援体制を作ることも入所児にとって意味を成すものであると思われる。

昨今においては、メディアで思春期児童の凶悪犯罪が取り上げられるようになった。犯罪や非行と対人的信頼の乏しさとの関連が示唆されている研究もある（天貝、2001）。しかしながら、児童期信頼感を測定する尺度は少なく、信頼感と対人行動との関連性をみた研究も少ない。

今後、対人的信頼と対人行動との関連性が示唆されれば、犯罪や非行を未然に防ぐための子どもたちへの支援策となりうると思われる。それだけでなく、今回の調査においてみられた児童養護施設入所児への心理的支援ならびに、対人行動に何らかの問題がみられる家庭の子どもたちへの支援に役立てることができると思われる。

### 謝　辞

本研究は福岡女学院大学大学院での修士論文に加筆・修正を加えたものである。本研究の実施にあたっては、佐賀県の小学校、佐賀県、大分県、福岡県の児童養護施設のよき理解と協力とによってなし得たことを報告し、深く感謝の意を表します。

また、研究の指導にあたっていただいた、福岡女学院大学大学院人文科学研究科牧正興教授、米川勉教授、ご協力頂いた院生のみなさんに深く感謝の意を表します。

### 文　献

(1) 天貝由美子著「信頼感の発達心理学」(2001) 新曜社
(2) 浅倉恵一・他著「子どもの福祉と養護内容－施設における実践をどうすすめるか」(2004) ミネルヴァ書房
(3) 児童養護研究会編「養護施設と子どもたち」(1994) 朱鷺書房
(4) J. Bowlby 著　黒田実朗・他訳「母子関係の理論①愛着行動」(1976) 岩崎学術出版社
(5) 加藤尚子「児童養護施設における愛着障害の子どもとのプレイセラピー―愛着の再形成をはかる治療的工夫と生活との連携―」(2003)『立教大学社会福祉研究』23
(6) 北九州市児童虐待事例検討委員会編「ストップ・ザ・虐待Ⅳ－被虐待児と家族への援助の提案」(2000) 北九州市児童相談所
(7) 許斐有著「子どもの権利と児童福祉法」(1996) 信山社
(8) 厚生労働省「児童養護施設入所児等調査」(2002)
(9) 望月彰著「自立支援の児童養護論」(2004) ミネルヴァ書房
(10) 西澤哲著「子どもの虐待」(1994) 誠信書房
(11) 酒井厚著「対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ－重要な他者間での信頼すること・信頼されること」(2005) 川島書店